

(二〇一二年度)

# 10 国 語 問 題 (九〇分)

(この問題冊子は15ページ、三問である。)

## 受験についての注意

- 一、監督の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、携帯電話・PHSの電源は切ること。
- 三、試験開始前に、監督から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のみミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 四、監督から試験開始の合図があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっているかどうか確かめること。
- 五、解答は記述式解答用紙Ⅰ・Ⅱに記入すること。その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 七、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。採点が不可能になる。
- 八、試験時間中に退場してはならない。
- 九、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十、問題冊子は必ず持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

常日頃、私たちは、「古典」とか「伝統」という言葉を、さしたる注意も払わずに使っている。「古典」は、英語の形容詞なら「classic」だろうし、「伝統」は「traditional」だろう。「クラシック音楽」と言えば、まずは十九世紀以前の西洋音楽を指していぶからないし、「伝統芸能」と言えば、日本の能狂言、歌舞伎、文楽などを意味していると考える人は多いはずだ。更には、「民族芸能」あるいは「民俗芸能」という言い方もあって、時たま音楽学者が、「ベートーベンだって民族音楽なのだ」と声を振り絞って主張しても、学界に固有の奇矯な行動だと思つて、取り合わない人が多い。いわんや、歌舞伎や文楽より四分の三世紀ほど前に隆盛を極めたフランスの悲劇や喜劇について、「伝統演劇」などと言い出す人はいないだろうし、「民族芸能」と言えば、まずは西洋文明の周縁部の話だと見なされる。

日本のものについて言えば、NHKの番組などが、能狂言、歌舞伎、文楽、更には日本舞踊まで、「古典芸能」というタイトルで通用させて人は訝らないのだが、それではこれらの芸能が、いつの時代から「古典」の称号を担うようになったのかと尋ねれば、大方の人は返事に窮する。一歩進めて、地方の寺社に伝わっているような芸能、たとえばなになにに神楽と、顔見世の看板を掲げている歌舞伎とは同じ「伝統芸能」なのかと問えば、恐らく一様に違うという反応を示す。お神楽のほうは「民俗芸能」だ、などと言つてお茶を濁しておいても、諸外国へこれらの芸能が巡業に行ったときには、問題は先鋭化する。<sup>2</sup>五流の能と地方の神楽が同じ扱いを受けたならば、それは穏やかではないのだが、招いているほうにしてみれば、どちらも“traditional”の形容詞で括るのだから、能狂言も山伏神楽も違いはあるまいという受容態度である。

確かにヨーロッパでも、「伝統的」という単語を使わないわけではない。一六八〇年に、ルイ十四世の勅令によって創設されたコメディイフランセーズは、フランスで「最も伝統のある劇場」であるし、それより十年ほど早く作られた王立音楽アカデミー、つまりオペラ座も、歴史的に「伝統」であることには違いない。しかしだからと言って、コメディイフランセーズで上演されるコルネイユやモリエール、ラシーヌの作品を「伝統演劇」などとは決して呼ばない。それらは「古典劇」なのであって、そ

ここに付けられる形容詞は「古典的」であり、「伝統的」ではない。これは時間的な古さや、制度の連続性の問題ではない。一六八〇年の日本では、まだ 3 が出るか出ないかという時期なのだし、歌舞伎にしても、創成期の混沌の中にあった。しかしフランスでは、ラシーヌ悲劇がコメディ＝フランセーズで、「古典として」上演されるべく定められて、この劇場の柿落こげらとしには、ラシーヌの『フェードル』が選ばれていたのである。

辞書学におさらいしておくならば、「古典」あるいは「古典的」とは、4 文芸の作品を言うのであり、それらは「クラス」で学習されるものであった。それは単に劇場の内部においての話ではない。公教育のカリキュラムに組み込まれて、二十世紀に至っても、たとえばラシーヌ悲劇の一作も、モリエール喜劇の一篇も読んだことがなくて、中等教育終了資格試験に合格するということはあり得ない、という全社会的な了解のもとで機能していた。それは舞台芸術の実践の上でも同じであった。俳優術の基本は、そうした十七世紀の古典主義劇作術のつとつた戯曲を学ぶことで培われてきたのである。音楽とバレエにおける規範の制度化は、それよりは遅れるが、しかし「クラシック」と呼ばれる作品群が、同じような機能を果たすことに変わりはない。だからこそ、5 変革のベクトルは、これらの「古典」に批判の矛先を向け、あるいはそれらを乗り越えることで、成立してきたのであった。

それでは日本の「伝統芸能」に、同じような現象が認められるのだろうか。確かに、そのように呼ばれる芸能のジャンルの内部では、規範意識もあるだろうし、そうした「専門知」の伝達が、「伝承」という言葉によって表されるように、人から人へと、身体から身体へと伝えられて行く伝承のほう<sup>6</sup>が、伝承の役割をテキストが全面的に担っている場合よりも、強固でさえあるだろう。それが、西洋世界における「古典」の伝承とは大いに異なっていることは言をまたない。しかし、問題であるのは、そのような「伝承」が、あくまでも専門的な技能集団の内部の問題に留まっ<sup>6</sup>ていて、社会的に広く共有されているものではないということだ。

もちろん、こうした専門的な技能集団においても、「古典」と呼びうるものがあつたことを、例えば世阿弥における和歌や王朝文学のような形で、我々は知っている。和歌や王朝文学は、能作者世阿弥にとっては言うまでもなく、演劇人としての世阿

弥にとっても、美学的規範であり、つまり「古典」として、学ぶべきコーパスなのであった。同じようなことは、江戸時代の物書きたちにとつての謡曲や、戦物語についても言えるかも知れない。寺子屋での教材に、謡曲の抜粋が用いられ、こうした受容の回路を伝って、式楽として閉ざされてしまった江戸時代にあつても、能の詞章が庶民のあいだで生き続けたこと、しかもその際、詞章の洗練された世阿弥系の謡曲が持て囃されたことが、明治以後の近代化の波に襲われた時にも、能の生き延びるよすがとなつたことに、研究者が注目し出してから、すでに四半世紀以上は経っている。歌舞伎の台詞や人形浄瑠璃の詞章にしても、そのような 8 受容は、もっと注目されてもよいはずであつた。

しかし、たとえばフランスの「公教育」における十七世紀の「古典の受容」と比べれば、それは、やはり個人あるいは限られた集団の楽しみのレベルに留まっていた。職業的専門知の伝承となれば、それは多かれ少なかれ、口伝あるいは秘伝といった、閉鎖的な「伝承」の回路によつて可能になつていたに過ぎない。「伝統芸能」あるいは「伝統演劇」という、近代化の発明になる用語が、多かれ少なかれ「秘儀伝授」の\_AURAをもつて見られ、あるいは語られてきた謂れもそこにある。親から子へ、子から孫へ、と言つた、「血族的伝承」の神話を支えているのも、まさにこの文脈であつた。

西洋型舞台芸術については、「伝統演劇」という単語を使わず、非西洋型のそれについてのみ用いるという単純な事実。それは、単なる用語の上のご都合主義とばかりは言えないだろう。そこには、公然と口にはしないものの、西洋社会の側からの、サイード的な意味での「オリエンタリズム」が歴然と窺えるからである。それは、当然に「土着的なるもの」への幻想に裏打ちされているから、こうした「伝承」の知は、出来るだけ 12 な、つまり「民族的」あるいは「民俗的」な表象であることが望ましい。

(渡邊守章『越境する伝統』)

〔注〕 ○五流…能楽の五つの流派。

○コーパス…語彙索引などの言語資料。

○\_AURA…オーラ。独特の雰囲気。

○サイド：『オリエンタリズム』の著者、エドワード・W・サイド。

問一 傍線部1の「ベートーベンだつて民族音楽なのだ」とは、どういう意味か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a ベートーベンも庶民的な音楽性を多分に含んでいる。
- b ベートーベンも西洋の土着の音楽と深く関係している。
- c ベートーベンにも日本の芸能に類似した音楽がある。
- d ベートーベンにも「クラシック」と異なる作風がある。

問二 傍線部2の「問題は先鋭化する」とは、どういうことか。説明せよ。

問三 空欄3に入る人物としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 近松門左衛門
- b 井原西鶴
- c 鶴屋南北
- d 河竹黙阿弥

問四 空欄4に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「伝承される」
- b 「規範となる」
- c 「歴史的な」
- d 「専門知の」

問五 傍線部5の「変革のベクトル」とは、この場合どういう意味か。説明せよ。

問六 傍線部6の「テキストが全面的に担っている」とはどういう場合か。説明せよ。

問七 傍線部7の「式楽として閉ざされてしまった」とはどういうことか。説明せよ。

問八 空欄8に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「庶民的」      b 「古典的」      c 「専門的」      d 「美学的」

問九 傍線部9、10の「秘儀伝授」の「アウラ」、「血族的伝承」の「神話」という表現に反映されている筆者の見方として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 専門的な技能集団における伝承は強固ではあるが閉ざされていた。  
b 「古典」の伝承は社会的に広く共有されることで近代化してきた。  
c 詞章の洗練された世阿弥系の謡曲は職業的専門知に留まらなかった。  
d 和歌や王朝文学のような美学的規範が伝統芸能を「古典」たらしめた。

問十 傍線部11について、筆者は「サイード的な意味での「オリエンタリズム」という語句でどのような指摘をしているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「土着的なるもの」という幻想に裏打ちされた「伝統」の誤用。  
b 西洋世界にのみ「古典」という美学的規範があるとする先入観。  
c 「伝統」という用語を東洋世界に対して使用する西洋世界の優位性。  
d 「伝統」という用語を東洋世界にあてはめようとする一方的な態度。

問十一 空欄12に入る語としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「非土着的」
- b 「非技能的」
- c 「非東洋的」
- d 「非西洋的」

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

源三位入道はゆゆしく計らひ申したりけれども、遠国の者までは云ふに及ばず、近国の源氏だにもいそぎ打上る一人もなし。山門の大衆は心替りしつ。<sup>2</sup>「その先途を遂げず、風吹けば木安からずと、世の煩ひ、人の歎き、身のため家のためよしなき事申し勧めまゐらせて亡びぬる者かな」と、貴賤口々に申しけり。

かの入道と申すは、清和帝の第六皇子貞純親王の二代の苗裔、<sup>4</sup>多田新発満仲が子、摂津守頼光が三代の後胤、参河守頼綱が孫、兵庫頭仲正が子也。保元の合戦の時、御方にて一方の先陣を賜り凶徒を退けたりけれども、させる勲功の賞にも預らず、怨みを含みながら大内の守護して年久しく成り、地下にのみして殿上をゆりざりければ、

<sup>5</sup>人しれぬ大内山の山もりは木隠れてのみ月を見るかな

と読みてまゐらせたりければ、「不便なり」とて、四位して昇殿を許さる。始めて殿上を通りけるに、ある女房の、  
つきづきしくもあゆぶものかな

と云ひたりければ、頼政とりあへず、

<sup>7</sup>いつしかに雲の上をば踏みなれて

と申したりければ、優に甲斐甲斐しと感じけり。又四位の殿上人にて久しく世に仕へ奉りけるに、述懐仕りて、

<sup>8</sup>のぼるべきたよりなければ木の本に椎を拾ひて世を渡るかな

と申したりけるに依りて、七十五にて三位を許されて後、前途既に遂げぬとて出家して、源三位入道ともいはれけり。大方この頼政は、歌に於ては手広き者にぞ思し召されける。鳥羽院御時に、宇治川・藤鞭・桐火桶・頼政と四題を下させ給ひ、「一首に隠してまゐらせよ」と勅定ありけるに、

<sup>11</sup>宇治川の瀬々の淵々落ちたぎり氷魚けさいかに寄りまさるらん

と申したりければ、時の人々、「我々は一の題をだにも一首に隠すはゆゆしき大事なるに、あまたの題を程なく仕りたる事、



実に有りがたし」と感じ申しけり。君も「いみじく仕りたり」と叡感有りけり。

(『源平盛衰記』)

〔注〕源三位入道：源頼政（一一〇四〜八〇）。平安時代末期の歌人。武将。以仁王と平家追討を企てたが、事前に発覚して宇

治平等院で自殺した。山門の大衆：比叡山の衆徒、僧兵。貞純親王：清和天皇皇子（生年未詳〜九一六）。多田

新発満仲：源満仲（九一三〜九七）。貞純親王の孫。経基の子。平安時代の武将。摂津守頼光：源頼光（九四八〜一〇

二二）。満仲の子。平安時代の武将。参河守頼綱：源頼綱（一〇二五〜九七）。頼光の孫。頼国の子。平安時代の歌人。

武将。兵庫頭仲正：源仲正（生没年未詳。一一四〇ころ没）。頼綱の子。頼政の父。平安時代の歌人。武将。藤鞭：

藤蔓で作った鞭。桐火桶：桐の幹をくり抜いて作った火鉢。氷魚：鮎の稚魚。琵琶湖や宇治川で冬に多く収穫され

る。

問一 傍線部「ゆゆしく計らひ申したりけれども」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 以仁王擁立は実におそれ多い計画であったということ。
- b 平家追討の計画はあまりに時期尚早であったということ。
- c 平家追討の計画そのものは実に立派であったということ。
- d 以仁王とともに破滅することになる不吉な計画であったということ。

問二 傍線部2「その先途を遂げず、風吹けば木安からず」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 反乱はその目的が達成されないと、いたずらに騒ぐばかりで人々に迷惑がかかること。
- b 頼政はその将来が不安だったので、小さなきっかけから大きな事件を起こしてしまったこと。
- c 頼政がその最期を迎えるまでは、人々は落ち着いて夜も眠れなかったこと。
- d 反乱はその決着が付くまでは、いつまでも世の中の矛盾を批判し続けるということ。

問三 傍線部3「よしなき事申し勧めまゐらせて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 達成されても意味のないような反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。
- b 達成される可能性のないような反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。
- c 自分が決起する必然性などない反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。
- d 世の乱れを一層乱すことになる反乱を、以仁王に決起させてしまったこと。

問四 傍線部4「御方にて」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 宮中守護の役割を負っていたこと。
- b 源氏方の大将として先陣を任されていたこと。
- c 勝利した後白河天皇方に付いていたこと。
- d 敗戦した崇徳上皇方に付いていたこと。

問五 傍線部5の和歌「人しれぬ大内山の山もりは木隠れてのみ月を見るかな」を、「大内山」「山もり」「木隠れて」「月」がそれぞれ何を指しているのかに注意しながら、現代語に訳せ。

問六 傍線部6「不便なり」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 困ったことになった。
- b かわいそうな奴だ。
- c もっとうまく詠めないのか。
- d 見事な和歌を詠んだな。

問七 傍線部7「いつしかに雲の上をば踏みなれて」は下句「つきづきしくもあゆぶものかな」に付けた上句である。「雲の上」が何を指すのかに注意しながら、この上句を現代語に訳せ。

問八 傍線部8の和歌「のぼるべきたよりなければ木の本に椎を拾ひて世を渡るかな」を、「のぼる」「椎」がそれぞれ何を指しているのかを明らかにしながら、現代語に訳せ。

問九 傍線部9「前途既に遂げぬ」とあるが、どのような意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a もうこれ以上は出世できない。
- b ついに先祖の位階を超えた。
- c やっと人並みの扱いが受けられる。
- d 将来への希望はこれで失せた。

問十 傍線部10「歌に於ては手広き者にぞ思し召されける」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なもの一つを選べ。

- a スケールの大きい叙景歌を詠む歌人として評価されていたこと。
- b 和歌の領域を越えた才能を発揮するマルチタレントとして評価されていたこと。
- c 和歌の知識に豊かなテクニシャンとして評価されていたこと。
- d 即詠の名手として和歌を詠むスピードが何より評価されていたこと。

問十一 傍線部11の和歌「宇治川の瀬々の淵々落ちたざり氷魚けさいかに寄りまさるらん」は、宇治川・藤鞭・桐火桶・頼政の四つの題を「隠し題」(物名ものなともいう)として、物の名を他の語句に隠して詠んでいる(「宇治川」のみは実は隠していない)。その箇所を指摘しながら、この和歌を現代語に訳せ。

三

次の文章を読んで、後の間に答えよ。ただし、設問の関係で送り仮名を付していないところがある。

人之悲喜、雖<sup>モ</sup>本<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>、然<sup>レドモ</sup>亦<sup>ズ</sup>生<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>境<sup>ニ</sup>。心無<sup>ニ</sup>係<sup>レ</sup>累<sup>一</sup>、則<sup>チ</sup>对<sup>シテ</sup>境<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>変<sup>ゼ</sup>、悲<sup>三</sup>

喜何從而入乎。淵明見<sup>レバ</sup>二林木交<sup>レ</sup>蔭<sup>、</sup>禽鳥變<sup>ズ</sup>声<sup>ヲ</sup>、則<sup>チ</sup>歛<sup>トシテ</sup>然<sup>有<sup>レ</sup>喜。</sup>人以<sup>テ</sup>

為<sup>ス</sup>達<sup>スト</sup>道<sup>ニ</sup>。余謂<sup>、</sup>尚<sup>ホ</sup>未<sup>ダ</sup>免<sup>レ</sup>著<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>境<sup>ニ</sup>者<sup>ナリト</sup>。歐陽永叔先<sup>ニ</sup>在<sup>リテ</sup>二滁陽、有<sup>ニ</sup>啼鳥一<sup>ノ</sup>

篇<sup>ヘン</sup>。意謂<sup>、</sup>緣<sup>ヨリテ</sup>巧舌之人<sup>ニ</sup>、謫<sup>タク</sup>官<sup>、</sup>而今反<sup>ツテ</sup>愛<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>声<sup>ヲ</sup>。後<sup>ニ</sup>在<sup>リテ</sup>二崇政殿、又有<sup>ニ</sup>啼

鳥一篇、似<sup>シ</sup>反<sup>ニ</sup>滁陽之詠<sup>一</sup>。其<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>、百舌子、莫<sup>カレトイフ</sup>道<sup>ニ</sup>泥滑滑<sup>一</sup>。其<sup>ノ</sup>末章<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>、

可<sup>シ</sup>憐<sup>ム</sup>枕上五更<sup>ニ</sup>聽<sup>クハ</sup>、不<sup>ト</sup>似<sup>ニ</sup>滁州山裏<sup>ニ</sup>聞<sup>クニ</sup>。蓋<sup>ケダシ</sup>心<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>中<sup>外</sup>枯<sup>苑</sup>之<sup>不<sup>レ</sup>同<sup>、</sup>則<sup>チ</sup></sup>

对<sup>スルニ</sup>境<sup>ニ</sup>之際、悲喜<sup>レ</sup>之<sup>ニ</sup>爾<sup>ノ</sup>。啼鳥之<sup>ノ</sup>声、夫豈<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>二哉<sup>一</sup>。

(『韻語陽秋』卷十六による)

〔注〕○淵明―東晋の陶淵明。 ○余―この文章の筆者、宋の葛立方。 ○歐陽永叔―宋の歐陽修。永叔はその字。 ○滁陽―

地名。安徽省にある。歐陽修は滁州刺史としてこの地に転出して来た。 ○啼鳥一篇―「啼鳥」と題する詩一編。 ○崇政

殿―中央の枢密院のこと。○百舌子―鳥の名。その鳴き声が変化に富み、百鳥の舌を以て名づく。また、人の多言なる者にたとえる。○泥滑滑―竹鷄(鳥の名)の鳴き声。○五更―夜明け前、午前四時頃。○枯苑―枯栄と同義。苑は盛んに茂ること。

問一 傍線部1「境」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 佳境
- b 詩境
- c 環境
- d 境遇
- e 苦境

問二 傍線部2はどのような意味か。平易な日本語に訳せ。

問三 傍線部3について、次のⅠ・Ⅱの問に答えよ。

Ⅰ 全文ひらがなで書き下し文に直せ。

Ⅱ どういう意味か。平易な日本語に訳せ。

問四 傍線部4について、「啼鳥」の詩句の中には、「我遭ごん讒ざん口くち身落しん此、毎ま聞き巧舌くわく宜い可憎か」(可憎は憎いの意)と見える。

「今反愛其声」とは、どういうことを言っているのか。分かり易く説明せよ。

問五 傍線部5はどのような意味か。平易な日本語に訳せ。

問六 傍線部6「可憐」と共通する意味で用いるものはどれか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 可<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>身上衣正单 心憂<sub>二</sub>炭<sub>一</sub>賤<sub>二</sub>願<sub>二</sub>天<sub>一</sub>寒<sub>一</sub> (賤は安いの意)
- b 可<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>八九十 齒墮<sub>二</sub>双<sub>一</sub>眸昏
- c 可<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>九月初三夜 露似<sub>二</sub>真<sub>一</sub>珠<sub>二</sub>月<sub>一</sub>似<sub>レ</sub>弓
- d 可<sub>レ</sub>憐<sub>レ</sub>春浅遊人少 好傍<sub>二</sub>池<sub>一</sub>辺<sub>二</sub>下<sub>レ</sub>馬<sub>一</sub>行 (傍はそうの意)

問七 傍線部7「枯」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 左遷されおちぶれている状態
- b やせ衰えている状態
- c 俗気がなくなっている状態
- d 貧乏に苦しんでいる状態

問八 空欄部Xには「したがふ」と訓ずる字が入る。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 遵
- b 順
- c 循
- d 随

問九 次の説明について、本文の理解としてもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 陶淵明は閑静な生活を愛し、超然としてこだわらない人物である。
- b 欧陽修は滁陽では鳥の声を聞く気にならず、崇政殿では自然にその声に耳を傾けられるようになった。
- c 欧陽修の二つの「啼鳥」の詩において、啼鳥の声には本来、相違はない。
- d 鳥の声には、人の心に喜びや悲しみの感情を呼び起こす力が具わっている。

